

- 1 **くがにくとぅば[黄金言葉] vol.172**
「観光×デザイン」
 株式会社ファンファーレ・ジャパン 代表取締役社長 島袋 武志
- 6 **地域リレーションシップ情報 164**
沖縄総合事務局経済産業部の最近の取組について
「地域未来牽引」企業サミットin会津若松」の開催
- 7 **地域リレーションシップ情報 165**
沖縄総合事務局経済産業部の最近の取組について
平成29年度沖縄国際物流拠点活用推進事業
実施状況報告会について
- 8 **中小機構 沖縄事務所の取組**
中小企業の販路開拓への取組みについて
- 10 **沖縄サッカーキャンプ2018の経済波及効果**
- 18 **おきぎんマーケティングレポート**
第72回おきぎん企業動向調査
(2018年4～6月期) 調査結果
 ～県内（地域・業種別）の経営環境と業況感～
- 26 **けいざい風水**
- 28 **おきぎんカトレアクラブ通信**
- 30 **県内景況・確報**
 2018年4月の県内景況
- 37 **国内景気動向**
- 38 **沖縄マーケティング情報**
 ①沖縄県内の事業所数・従業者数・人口・世帯数
 ②世界の中の沖縄(年次)
 ③グラフでみる沖縄経済
 ④数値でみる沖縄県・全国の経済動向(月次)
- 58 **経済社会のできごと(沖縄、国内・海外)**
 2018年5月
- 59 **各種フェア開催インフォメーション**
- 60 **各種セミナー等開催インフォメーション**



表紙写真/座間味のサンゴ礁

「観光×デザイン」

Fanfare  Japan

株式会社ファンファーレ・ジャパン

代表取締役社長 島袋 武志



今回は、沖縄市コザの商店街の空き店舗をホテルにリノベーションし、街自体をホテルのラウンジに見立てて、街の独特な空気感を観光コンテンツとして制作販売している、株式会社ファンファーレ・ジャパンの島袋 武志 代表取締役社長にお話を伺って参りました。

アドベンチャー精神で従来の市場や 取り組みをイノベーションしていく

よく何をしている会社ですかと聞かれますが、観光コンテンツの制作販売をしている会社だと答えています。

弊社の事業は「観光×デザイン」というテーマのもと「メディア」「宿泊」「映画」という3つの柱があります。「メディア」は情報や商品を国内外へ発信・販売、「宿泊」は国内外のお客様を沖縄へ誘客、「映画」は、沖縄を舞台にした映画の制作および世界の映画の配給を国内外へ行っています。

この3つの柱を中心に従来のあり方とは違った弊社なりの商品(コンテンツ)の販売を行うことでイノベーションしていきたいと考えています。

弊社の会社名の由来は、「覚悟を持って、新世界への冒険へ出発する!」という Mr.Children の楽曲「fanfare」のテーマに惹かれたことにあります。曲のようにベンチャー精神ならぬアドベンチャー精神を持ち、従来の市場や取り組みをイノベーションしていくことを理念としています。

「観光×デザイン」の定義

弊社の「観光×デザイン」の定義では、「観光」は体験してもらうこと、「デザイン」は伝えることとしています。沖縄の体験を伝えることが我々のテーマです。我々が提供する沖縄の価値を体験してもらうということを生業としています。

「メディア業」

「絵になる沖縄」をテーマに、写真をメインに情緒ある沖縄を紹介する観光フリーペーパー「トリップショット」を自主企画として発行。メディア事業で多方面から観光に寄与するプロモーションを行っています。



「宿泊業」

フリーペーパー「トリップショット」の世界観を体験していただくために、トリップショット的な情緒あるエリアにて宿泊業を展開しています。民泊ではなく旅館業の免許を取得して運営。



「映画製作・配給業」

沖縄観光商品として「映画」を制作し配給を行っていきます。既存の配給システムでの配給だけではなく、観光商品としての新たな配給ルートも構築していきます。



街がホテルのラウンジ

私は沖縄市の中心市街地の活性化に従事してもう10年位になりますが、民間事業社の強みを活かした街づくりができないかと考え約2年前より取り組んだのが斬新なスタイルのホテル「Tripshot Hotels Koza」の運営です。

コザの街はアメリカ文化の影響が色濃く残っている沖縄市の中心市街地です。1970年代～80年代にかけて音楽やファッションを中心に国際的ともいえる様々な情報を発信してきました。かつての賑わいはなくなりましたが、今でも日本の文化とアメリカの文化が混ざり合った独特な景観、文化が残っています。

そこで、コザの街そのものを感じ、楽しんでいただくために、商店街の空き店舗をそれぞれホテルにリノベーションしました。テーマは「街がホテルのラウンジ」です。商店街をホテルに見立てた街ホテルを楽しむことができます。

コザの空気感

宿泊客に部屋をみていただいて、个性的ですねと言われるのですが、我々からしてみればコザの空気感を残しているだけで、特に大きく手を入れている訳ではありません。部屋そのものの素材を活かしている結果、これがリアルに伝わってきているだけです。

「セントラル」は元キャバレーをリノベーションした部屋で、宿泊客の9割方は部屋をみて笑いが出ます。しかし、この部屋の歴史背景を分かっていたら納得いただけます。

また、全部屋の窓からのロケーションは良くないのですが、部屋自体の価値があります。リゾート地では青い海、青い空と窓からの借景が命ですが、ホテル「Tripshot Hotels Koza」では雨の日でも、冬でも部屋のクオリティは一定です。この部屋は24時間全天候型で価値が変わりません。台風が来ても逆にテンションが上がり、沖縄の台風も体験できます。

沖縄市中央パークアベニューは立地的に屋根が付いており、「街がホテルのラウンジ」というキャッチコピーの通り、このカフェがフロン

トになって、沖縄市中央パークアベニューというラウンジが広がっています。現在、客室は5室ですが、ひとつの通りをホテルと見立てて今後も少しずつ客室を増設する予定です。



▲70年代のロックスターが泊りそうな「Rock Side」

地域の活性化には信頼できる街のキーマンの力が不可欠

会社の運営、特にホテルの運営については、取締役の神山氏との出会いを抜きに語れません。

私は、前職ではフリーペーパーをつくる会社にいました。当時、地域活性化をテーマに取材する機会があり、地元沖縄市のためになにかできないかということで、沖縄市を紹介するフリーペーパーを当時この場所でバーを営んでいた神山氏と一緒に作ったのが、この会社設立のきっかけだったと思います。

当時はモグコザ団と称して、我々が街の人と、体験しながら食レポを行い、今のユーチューバーのようなことを行っていました。こうした取り組みが評価されて、沖縄市観光協会さんの広報誌の委託を受けるなど、いろいろな事業の委託を受けるようになりました。

神山氏は27才の時からこの場所でバーを営み、その時に知り合って、思い出づくりと称して2人でイベントをよく開いていました。それから30代半ばで再開し、やるなら街のためにもなり、且つ、お互いの利益になることをやろうということで現在に至っています。

神山氏はコザの街のキーマンであり、今でもコザの裏側というテレビ番組を彼が受託して作っていますが、コザの中心市街地はもちろん、沖縄市の裏も表も全部熟知しています。地域の活性化には信頼できる街のキーマンの力が不可欠です。



▲左：島袋社長 右：神山取締役

コザは遊び人の街

これまでコザの街の活性化に携わってきてみえたのは、「コザは遊び人の街」だということです。

冗談半分で7、8年前に「遊び人の街宣言」をしてくださいと提言したことがあります。エイサーのまち宣言、ミュージックタウン、こどものまち宣言、スポーツコンベンションのまち宣言等々をされていますが、全て遊び人がいるから、エイサーも音楽もスポーツも栄えていると思います。

コザの街の活性化を考えると、まずはこの遊び人が集るコザの夜の街をPRしていくのがベストだと考えます。沖縄観光ツアーの中で一晚だけでもコザに飲みに来てくださいとキャンペーンをした方がいいと思います。

それを独自の取り組みとして行ったのが、「Tripshot Hotels Koza」です。コザの街の空気感は伝えるのが難しく、体験してもらわないとわかりません。コザの夜の街を体験していただき、通りのど真ん中に泊まっただけならば、一発で独特な空気感を感じることができ、ファンになってもらえる自信があります。

秘境

実はホテルをつくるにあたって、妻と北谷町、恩納村、読谷村、南城市など沖縄全県をリサーチし、その上でコザにしました。狙いは「秘境ホテル」です。現在ヴィラを展開している浜比嘉島もそうなのですが、山奥にあっと驚くホテルがあるというコンセプトです。

コザの中心市街地はシャッターが閉じている店舗も多く、観光客にとっては行く目的のない

いわば秘境のようなものです。同じコンセプトで、北谷町でやってもおそらく面白味はないと思いました。思ってもみない場所にあるからこそ、どの部屋もこつこつと階段を上ってガチャンと開いた時にこのようなユニークで思いもよらぬ空間に感動が広がります。



◀階段を上がると思いもよらぬ空間が広がる

次の展開として、コザと浜比嘉島以外に話が広がってくるのが南城市です。個人的に南城市は意外性がある場所と捉えています。リゾート観光地ではないのですが、立地的にどこの場所も明るく、海沿に行けば海がキラキラと輝いています。丘に行けば太陽が近いので明るく、この土地は非常に輝きを持っていると感じ、「Tripshot Villas Nanjo」をつくってみたいと考えています。

他に具体的なプランまではいたってないのですが、普天間や那覇市の商店街をリノベーションしても面白いと考えています。

我々ウチナンチュも声を上げる

私も神山氏も現在40代中盤ですが、30代の頃はそれぞれ自己表現というか、自己の利益だけを追求してきたのですが、この会社をお互い40代になって立ち上げたことで、「ウチナンチュだし、年も年だし、従来の壁をぶち壊してでも業界を良くしていくのは我々の責任ではないか」と思うようになりました。

県外からいろいろな方々が沖縄に来て尽力されているのですが、まずは我々ウチナンチュも声を上げたほうがいいと考えようになりました。

そのためには、事業の成果を挙げてイノベーションできる存在として認められるようになるのが今の私達の過程です。

現状を打破し、単にイノベーションするだけではなく、そのための「つるはし」を次の世代にも渡せるポジションになれるよう精進、努力して参ります。

Tripshot Hotels Koza



空き店舗の個性を客室にした「街ホテル」

<http://koza.tripshot-hotels.com>

中小企業の販路開拓への取組みについて

中小機構は、各地域の地域資源を活かした新商品・新サービスの開発や販路開拓、海外展開、事業承継、中小企業大学校による人材育成など、中小企業を様々なステージで支援している経済産業省管轄の支援機関です。

今回は、インターネットを利用した商取引、Eコマース（以下、EC）を活用した販路開拓への支援の取組みを紹介します。

【ECの動向】

■国内EC市場は急拡大中

- ▶市場規模は15兆円（2016年）を突破し、2010年からの6年間で約2倍へ。

■EC市場の伸びしろ

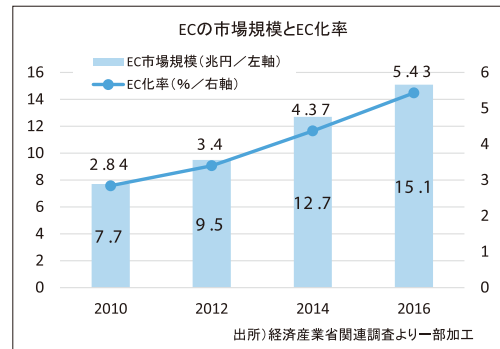
- ▶実際の商取引におけるEC化率は、2016年でまだ約5%。
- ▶スマホの普及によりECでモノを購入することが日常に。

■海外からの需要も大きく伸張！

- ▶海外から日本の商品をECで購入した額をみると、中国が第1位で1兆366億円（2016）。2014年の6,064億円から1.7倍と大幅増。「爆買い」からECにシフト。

■沖縄こそECを活用

- ▶“増加するインバウンド客へのリピート購入チャンスを逃さない”など、ECは沖縄にいながら国内外へビジネスを広げる有効な手段。



【中小機構の取組】



①無料のオンライン講座<ebiz>を公開 【ebiz】で検索！	▶ECに関する情報を随時掲載 ▶「ECモールの特徴とトレンド」や「越境ECで何が売られているか」など、わかりやすい動画を公開
②ECセミナー・ワークショップの開催	ECの仕組みや失敗しないためのコツなどをお伝えするセミナーを開催
③ECセミナーを開催する機関への講師派遣	各団体、支援機関にECの専門家を講師として派遣
④ECマッチングイベントの開催	2017年度は東京、大阪で開催

《募集中》 『モール活用型 ECマーケティング支援事業』

- ✓ ECモールを活用して海外マーケット（EU向け）へ進出したい中小企業を応援。
 - ✓ ヨーロッパのマーケットを対象に、ECモールへの出店費用を補助します。
 - ✓ フランス・パリの実店舗でのテスト・マーケティングに参加できます。
 - ✓ 中小機構のアドバイザーや登録パートナー企業がお手伝いいたします。
- 【→申込はコチラから→】 <https://crossborder.smrj.go.jp/>

募集期間
5/22～
7/20

【お問い合わせについて】

独立行政法人 中小企業基盤整備機構 沖縄事務所 TEL：098-859-7566
住所：沖縄県那覇市小禄1831-1 沖縄産業支援センター 313-1



ソデイカ需要

県外広がり期待

与那原町は沖縄本島の中で町域面積が一番小さな町ですが、かつて与那原港には山原船が出入りしていました。海運のほかにも1914年には那覇-与那原間に県内で初めての軽便鉄道が開通し、本島中南部の物流の要衝として栄えていました。古くから良好な漁場である中城湾を中心とした漁業が営まれており、当添漁港を中心に沖合・沿岸漁業も盛んです。

2017年1月には隣の西原町とともに、ソデイカの拠点産地として県から認定されました。沖縄の方言で「セイイカ」の名称で親しまれるソデイカは、寿命が1年程度と短いですが、体長は1メートル、体重は20キロにも達します。食用に供されるイカとしては最も大きいものの一つです。

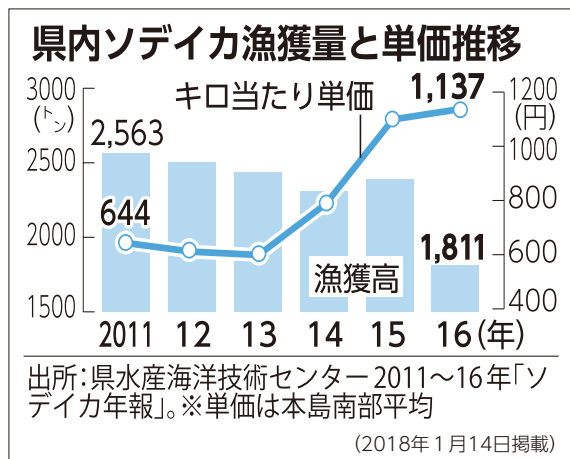
漁期は11月～翌年6月の8カ月間に限られますが、16年には県内漁業生産量の14%を占めるなど、マグロに次ぎ2番目に高い漁獲高となっています。

沖縄県では、まだ30年ほどしか経ていない比較的新しい漁業といえますが、今ではマグロに次ぐ重要な位置を占めています。

近年は、全国的な不漁によるイカ不足の傾向が続いており、ソデイカはスルメイカの代用として県外からの引き合いが増加し、価格も上昇傾向にあります。水揚げ後は約9割が県外に出荷され、刺し身、すしねたとして利用されています。

一方、沖縄県の「地域産業資源」として指定されており、ソデイカを加工した商品開発も増えています。沖縄の特産食品として「セイイカ」が今後全国的に広く浸透することが期待できます。

(沖縄銀行 与那原支店長 兼島 安雅)



県内の外国人労働者

人手不足を補う

沖縄経済は好調で、今後もリゾートホテル建設工事計画などがあり、景気はさらに拡大傾向にあります。一方、2017年11月の県内有効求人倍率は1.14倍と16年10月から14カ月連続で1倍以上となっており、多くの業種で「人手不足」の状況が続いています。

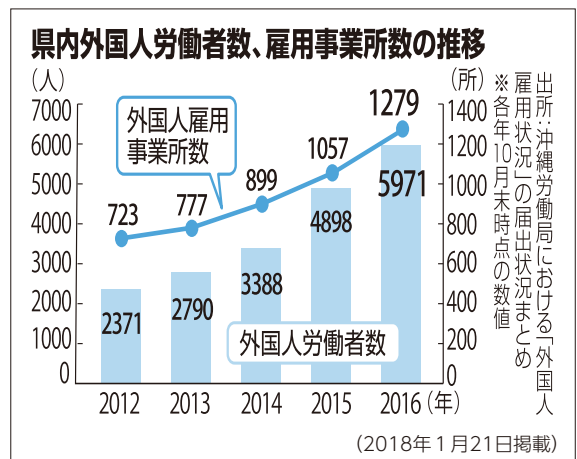
就労者側のニーズの多様化やミスマッチもあり、人手不足はなかなか解消されにくいようです。一部の企業は人員不足を補うために女性、高齢者の雇用や、外国人労働者の受け入れを実施しています。西原町では工業団地内の製造業や建設関連企業で、外国人労働者を雇用している企業が見受けられます。

県内では16年に約5,900人の外国人労働者が働いており、12年と比較して約2.5倍も伸びています。全国の約1.6倍と比較しても高い伸び率となっています。雇用する事業所も増加傾向にあり、産業別では宿泊業・飲食サービス業が16.1%と最も割合が高く、卸売業・小売業、建設業が続きます。

これらの数値が裏付けるように、県内のホテルや飲食店、コンビニエンスストアで外国人労働者がかなり見受けられるようになりました。一方、おきぎん経済研究所の調査では、人手不足の対策として外国人労働者の雇用については、積極的に取り組めていないという結果が見られます。

外国人労働者の雇用に当たっては言葉の壁や文化の違いといった不安はあるかと思いますが、今後の安定した事業経営のための雇用対策として、検討してみたいかががでしょうか。

(沖縄銀行 西原支店長 山里 将一郎)



医療通訳ボランティア 受け入れ態勢整備を

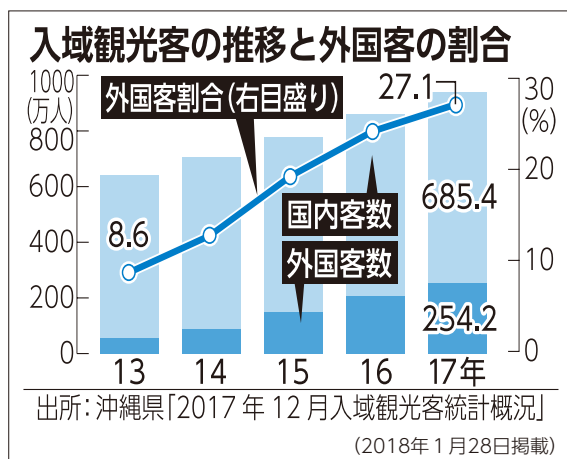
昨年、県内を訪れる外国人観光客が救急病院で緊急受診するケースが増え、医療費の未払いが増えている、というショッキングな新聞記事が掲載されました。

県内の外国人観光客数は、2017年暦年（1～12月）で、前年比約46万人増の254万人と過去最高を更新し、入域観光客数に占める割合は27.1%と高くなっています。沖縄県が17年3月に策定した「第5次県観光振興基本計画」では、21年度までに外国人観光客を現在の倍の400万人にすると上方修正しており、外国人急患数もさらに増える可能性があります。

一方で、県内では外国人観光客を受け入れる体制が整備できていないという医療機関もあり、緊急手術や入院が必要なケースでは、医学の知識を持ち、専門用語を説明できる人材が必要です。外国人観光客が安心・安全に沖縄滞在を楽しむためにも「医療通訳」をはじめ、外国人患者に対応できる仕組みを充実するなど受け入れ態勢を整備していく必要があります。

20年の東京五輪・パラリンピック開催に向けて、沖縄県でも外国人観光客が増えることが想定されます。外国人観光客の本国、旅行会社に対して、日本の医療保険制度を周知させるとともに、県民一人一人が「ウェルカムんちゅ」「おもてなし」の心を持ちつつ、県国際交流・人材育成財団の「医療通訳ボランティア」などといった活動にも関心を持ち、できることから取り組んでいくことが必要ではないでしょうか。

(沖縄銀行 我如古支店長 平島 達也)



八重瀬町のまちづくり 都市と自然・文化共存を

八重瀬町は2006年1月に旧東風平町と旧具志頭村が合併して誕生した町です。1993年に決定した那覇広域都市計画事業「屋宜原土地区画整理事業」「伊覇土地区画整理事業」による宅地造成により、人口が増加してきました。過去10年間で、総人口は15.6%、世帯数は30.9%も増加しています。

2014年4月には、国道507号津嘉山バイパス（那覇市仲井真から八重瀬町東風平の4車線5.28キロ）が全面開通したことにより、那覇市からのアクセス性が向上し、民間企業などによる宅地整備も進んでいます。

町内には大型商業施設、銀行、クリニック、ドラッグストアなどが立ち並び、那覇市のベッドタウンとして都市化が進んでいます。

人口の増加に比例し地価も上昇しており、県地価調査で同町伊覇地域の宅地価格は、07年の1平方メートル当たり8万200円に対し、17年には同10万6千円と32%上昇しています。

発展が進む一方、町名の由来にもなっている八重瀬岳をはじめとした自然、県内最古を誇る「富盛の石彫大獅子」、沖縄の自由民権運動の父・謝花昇の記念館など、自然・文化・歴史が多く残る地域でもあります。

今後も居住地域、商業地域、緑化地域など適切なゾーニングにより都市化する街並みと、自然・文化・歴史が共存する八重瀬町の発展を楽しみに注目したいと思います。

(沖縄銀行 八重瀬支店長 黒島 正)

